



新年の御挨拶

社団法人 日本測量協会関西支部

支部長 宮 井 宏

新年明けましておめでとうございます。旧年中は、関西支部の活動につきまして色々とお指導、御協力を賜り、ありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて関西にいる私たちにとりまして、やはり共通の大きな課題は南海トラフ大地震、大津波にどのように備えるのかということだと思います。そのためには過去の災害事例を研究、分析することが重要なことは皆さん御存じのとおりです。

そこで今日は、河田恵昭先生が小学五年生の国語の教科書に『百年後のふるさとを守る』という題で書かれた浜口儀兵衛の伝記を紹介しましょう。浜口儀兵衛は『稲むらの火』に登場する五兵衛の実在のモデルに当る人です。

『浜口儀兵衛は、文政三年紀州藩広村（今の和歌山県広川町）に生まれました。儀兵衛の家は、江戸と銚子で大きな醤油屋を営んでいました。三十四歳になった儀兵衛がちょうど広村にいたときのことです。安政元年十一月五日夕方四時ごろ、マグニチュード八・四の大地震が発生しました。震源地は和歌山県潮の岬の沖合。広村は震度六強の揺れにおそわれました。

この地震について、広川町養源寺に伝わる『安政聞録』は「大地震して壁などことごとく崩落、土塀は見るうちはたはたと手を反すごとく、あるいは地ひび割れ、水ふき出でしところもあり。弱き家はこれにたおれ、あるいはけが人あり。時に西方にあたり火の光天をこがし、大雷のごとき音、遠近に響くこと引き続いて、三、四度におよぶ。」と書き伝えています。

大雷のような音は津波が崖にぶつかって出る音です。津波の一番波によって浜に近い家々は倒され、二番波によって死者が出ました。三番波ではこわれた家などがことごとく運び去られてしまいました。津波はその後、四番波、五番波と続き、海がふだんの様子を取りもどすまでに六時間かかったということです。

なげき悲しむ声は山野に満ち、住む家も、食べ

るものも、着るものもない村人の中には希望を失い、村をすてようとする者が跡を絶ちませんでした。「このままでは、村がつぶれる。」そう思った儀兵衛は、考えに考えた末一つの計画を思いつきました。それは、村人自らの手で堤防をつくることを紀州藩に願い出ようというのです。材料費も、人々の賃金も、全部自分と店が出そうと決めました。藩から許しが出ました。

儀兵衛は村人に向かって「五十年後、いや、百年後に大津波が来ても村を守れる大堤防をつくろう。」と語りかけました。賃金を得られる仕事があり、それが村のためになるという案は村人たちをふり返らせました。ほとんどの村人が堤防づくりに参加することを決めたのです。

ところが安政二年十月、今度は江戸を大地震が襲いました。儀兵衛の江戸店は再建のめどが立たず、銚子の店だけになってしまいました。儀兵衛の「なんとしても、堤防を完成させる。」という固い決意に店の者たちが動かされ、店中が一丸となって働きました。ついに四年にわたる工事が終わり、全長約六百メートル、高さ四・五メートルの広村堤防が完成しました。堤防の内側には数千本の松も植えられていました。

そして堤防完成から八十八年後の昭和二十一年、再び和歌山沖でマグニチュード八・〇の大地震が発生しました。広村には高さ四メートルの津波がおし寄せましたが、堤防によって村の大部分が浸水の害を受けることはありませんでした。

「百年後に大津波が来ても村を守れる堤防を」という儀兵衛の切なる願いは、このとき実を結んだのです。（原文を約四分の一に縮めてあります。）

この伝記の最後に教科書では次のような設問があります。

『伝記を読んで、自分の生き方について考えよう「儀兵衛」の行動や考え方で、自分もこうありたいと思う所はあるだろうか。』

子供よりもむしろ大人に考えさせる質問ですね。



新年のごあいさつ

国土地理院近畿地方測量部

部長 中川 勝 登

新年あけましておめでとうございます。

日本測量協会関西支部及び会員の皆様にとって、本年が実り多きよい年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

今年は昭和から平成に変わって25年目の節目の年となります。いつもながら時間の経過が早く感じられるのですが、世の中はそれ以上の勢いで変化しています。さて、今年はどのような年になるのでしょうか。日本経済は長らく厳しい時代が続いていますが、新しい年は何とかこれを乗り越え、大きな飛躍の年としたいものです。

昨秋、私は奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳を見学する機会に恵まれました。この古墳の内部は普段は非公開だそうです。休日を利用してたまたま法隆寺を訪れたところ、そのすぐ近くにあるこの古墳が特別公開されていたというわけです。この遺跡についてはご存知の方も多いと思います。私はといえば、一般的に遺跡の発掘調査に測量技術が大きな貢献をしていることは知っておりますが、歴史そのものには全く素人ですので、藤ノ木古墳については、名前を聞いたことがある程度で何の知識もありませんでした。しかしせっかくの機会なのでと思い、多くの人が待つ順番の列に加わり、しばし待ったのちに中を見せていただきました。古墳の中に入るのは初めてでしたが、明るい緑の外見とは全く異なる印象の空間が内部にはありました。上下左右に石が敷き詰められた狭い通路を進むと、天井が高い円形の空間（玄室という

のでしょうか？）があり、奥に石の棺が安置されていました。説明してくださった方によれば、発掘当時、棺の中には2体の遺体が入っており、まわりから馬具や装飾品などが多数出土したそうです。古墳は盗掘にあっているのが普通だそうです。幸いにもそれを免れ、昭和60年から始まった発掘により多くの副葬品が発見されたとのこと。こうして藤ノ木古墳は現在に生きる私達が当時を知る貴重な情報―歴史の記録を提供してくれています。古代史に知識のない私も、偶然そのロマンに浸る時間を持てたわけです。法隆寺の重厚さとはまた異なる生々しい古代というものを感ずることができました。

その時代から現在に至るまで実に千数百年、明治の近代国家になってからも1世紀半近くが経過

しました。そして平成25年(2013年)の新年を迎えたわけですが、棺の中の2人(誰かはわからないそうです)からは、はるか後世の今の世の中がどう見えているのか、2人の生存当時から現在に至るまで、実にいろいろなことが起こり、社会や技術が変化・進歩し、生活や考え方も時代とともに変わり、その上に今という時代がある。この遺跡に接することで、現在まで延々と連なるこの国の長い歴史を改めて感じることもできました。逆に、100年後、1000年後の日本人が、21世紀初頭という時代を振り返ったらどう思うのか。私達の周りには情報があふれ、毎日が目まぐるしいですが、遠い将来から見ると、まだまだ技術も未熟な時代なのかかもしれません。また、歴史的にはどんな時代なのか、現代は戦後社会の変換期などとも言われていますが、今の時代もいずれは歴史の一部になるのでしょうか。そういう未来のためにも、今の時代、この1年を大切にしていきたいものです。そんなことを思わせてくれる藤ノ木古墳の体験でした。また、関西という土地はそんなことを考えさせてくれる環境に恵まれており、改めてよいところだとも思いました。

さて現実に戻ると、今は経済状況のみならず様々な問題が山積する厳しい時代ですが、測量技術者は、「地理空間情報」を整備し、またその維持更新を行い、信頼性の高いよい情報を社会に提供することで、人々の生活を豊かにし、社会の発展に貢献していく、そういう役割を担っているであろうと思います。これは地理空間情報活用推進基本法の理念そのものですが、測量技術者として、今の時代に課せられた使命をそこに見出し、小さいながらも歴史の一コマ、歴史をとどめる記録者ともなっていきたいものです。

今年も国土地理院は様々な施策に取り組んでいくこととしています。内容は別ページに記載しておりますが、従来から取り組んでいる品質の高い基盤的なデータの整備・提供とともに、最近特に力を入れている施策の一つが、「地理空間情報の利活用の推進」です。今年もこれらを進めていくことによって、基本法の理念に少しでも近づくべく取り組んでまいりたいと思います。引き続き国土地理院の業務へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。